くすの木

小林市立小林小学校　　校長通信
令和５年１１月２０日　第４４号　（文責　校長　吉井秀一）
TEL: (0984) 23-3510　E-mail:1401eb@miyazaki-c.ed.jp

十二月二日（土）実施予定の「シン・小林小まつり」の具体的な計画が動き出し、案内が始まりました。ここに至るまで、まちづくり協議会やＰＴＡの皆さんが何度も話合いを重ねてきました。学校としても４年ぶりに復活する大きな行事、加えて新たに発足した「こばっこきずな協働体」にとっては、初めての学校との大きな催しです。

今回実施するまつりには、「シン」がついています。これには、「新」。新たな地域とのつながり。そして、「真」。学校も保護者も地域も、無理をせずに、子どもと一緒に心から活動を楽しもうという思いが込められています。

久しぶりのことで不備も見つかるかもしれませんが、参加される皆さんの「シンから楽しむ笑顔」で、これまでの準備の労をねぎらっていただければと思います。

「平和」という美しきつくりもの

ロシアのウクライナ侵攻については、当初ロシアの一方的な攻撃にさらされた市民の様子が報道で大きく取り上げられ、宮崎にも避難してくる人たちがいるなど身近にも感じました。そして、突然平和を脅かしたロシアに世界の非難が集中し、日本もまた、ほかの国々と同様にウクライナ支援を続けています。ここでは私たちも立ち位置がはっきりしていたように思います。

その後に起こったイスラエルとパレスチナ自治区ガザの紛争。こちらは少し様相が違うようです。突然のハマスの襲撃を世界は一斉に「テロ」と非難しましたが、その後のイスラエルの報復は今、世界を震撼させています。もともとだれの国だったのか、だれの土地だったのか。ガザの人々は、７割が中東戦争によって逃れて来た難民だと言われています。

私こと。母親は昭和十年生まれの八十八歳。先の戦争が終わった年に十歳。自分の目を通した戦争を語ることができる最後の世代です。田舎で身近に被害を受けた者が少なかったせいか、母にとって戦果を挙げて帰還した祖父は自慢でした。しかし、私は母親の叔父から銃弾を受けて不自由になった踵（かかと）を見せてもらいながら、その時の話を聞いたのを覚えています。

戦後七十八年。日本は平和の尊さを信じて守り続けてきました。コロナの影響を受けながらも平和の象徴であるオリンピックも開催しました。

しかし今、世界が戦争の愚かさを反省して組織した国連もその役割を果たせていません。世界に影響を及ぼす大国が呼びかけても聞く耳を持たず、人の命を奪う愚かな行為を正当化するだけです。

戦争を本気でダメと言えるナマの体験者が少なくなり、豊かな大国と貧しい小国の間では、同じ価値観が全く通用しなくなっている危険な現代です。そこではお金も、立派な理念もまったく無力です。

「平和」も所詮人間が作り出したもの。「平和」は崩れないと思っていたのは、思い込みだったのでしょうか。

これから未来をつくる子どもたちには、何をもって、何を伝えればよいのでしょう。

私たちができるのは、自分たちが生きている平和で安全な環境を守り続けていくことの尊さを語り続けることでしょう。降りかかる災難や課題に出会ったとしても、決して「怒り」や「暴力」では本当の解決にならないことを私たち大人が伝え、態度で示していくことが最も重要です。その最前線が「学校」です。皆さんと共に平和を創り出す仲間でありたいと思います。

自転車のヘルメットを　遅すぎるのでは…と思うのですが、県立高校でも自転車のヘルメット着用について検討が始まったようです。他県ですが、ヘルメットをかぶっていなかった中学生の死亡事故が起こったばかりです。命に代えられるものはありません。ぜひ、検討ください。

新しい時計塔ができあがりました！

以前お知らせしましたが

本校の卒業生でもある　元文部科学大臣の　中山成彬　様から

昨年、150周年記念に寄付をいただきました。

このたび、その一部を使い、学校の東門に設置してあった時計塔を

新しくしました。

これからも、永い伝統を刻みながら

学校や故郷を愛する気持ちや「みんなでつくる学校」の

シンボルとなってくれることでしょう。

12月には、中山様への感謝の集会を予定しています。

「みんなで考え　みんなでつくる　みんなの小林小学校！」